

特別対談 細井 裕司 × 後藤 春彦

医学を基礎とする まちづくり(MBT) コロキウム開催へ

奈良県立医科大学理事長・学長 細井 裕司
奈良医大 MBT 研究所所長

早稲田大学教授 後藤 春彦
早稲田大学 MBT 研究所所長



ほそい ひろし

昭和23年生まれ、大阪府出身。奈良県立医科大学卒業、近畿大学医学部助教授を経て平成11年奈良県立医科大学耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座教授、附属病院副院長、理事を経て平成26年より現職。研究分野の専門は新聴覚(超音波や軟骨伝導聴覚)、耳科手術法、住居医学、ロボットとの会話方式など。

——早稲田大学では、奈良県立医科大学と共同でコロキウムを開催されるそうですが、概要を教えてください。

後藤 11月14日(13:00~20:00)に「医学を基礎とするまちづくり Medicine-Based Town(MBT) コロキウム」を開催します。当日は2部構成で、第一部を早稲田大学研究院フォーラム2016「MBTの最先端」と題し、基調講演会と報告会で構成(定員1100名、入場無料)し、第二部は「新産業創生のための企業と医師との交流相談会」と題し、リーガロイヤルホテル東京(定員500名、会費2000円)で開催します。HPから参加希望の受付をしており、<http://pi-mbt.wix.com/home> をご覧いただきたいと思います。

細井 第一部は、荒井正吾・奈良県知事とPatrick Seeb(パトリック・シープ)・米国ミネソタ州ロチェスター市DMC経済開発局経済開発地域づくり局长による基調講演と、後藤春彦による基調講演と、後藤春彦・早稲田大学MBT研究所所長とMBTコンソーシアム幹事会による報告会です。第二部は、奈良県立医科大学教授陣(約70名)と企業との交流相談会を中心、シープ局長との意見交換なども企画しています。

後藤 2012年以来、早稲田大学は奈良県立医科大学とMBTに関する共同研究を進め、昨年、早稲田大学において全学を挙げて推進すべき重点領域研究に選ばれるとともに、今年度から両大学にMBT研究所が開設されました。

もともと、近代都市計画という学問は、産業革命以降工場が黒い煙をもくもく吐き出し始めた時に、「どうやつたら『人間らしい暮らしができる』か」という点から医学や生物学などの学問が基礎になつて誕生した歴史的経緯があります。その結果、衛生的な生活環境を獲得するに至りました。しかしその後、重厚な産業を追求したことによ

り、今回のコロキウム開催により、早稲田大学のチャンネルを通じてMBTを全国の皆さんに

医学を基礎とする まちづくり(MBT) コロキウム開催へ

奈良県立医科大学理事長・学長
奈良医大 MBT 研究所所長

細井 裕司

早稲田大学教授
早稲田大学 MBT 研究所所長

後藤 春彦

11月14日、早稲田大学大隈講堂とリーガロイヤルホテル東京で、早稲田大学、奈良県立医科大学、(一社)MBTコンソーシアムは、「医学を基礎とするまちづくり Medicine-Based Town(MBT) コロキウム」を開催する。当日は2部構成で、第一部を早稲田大学研究院フォーラム2016「MBTの最先端」と題し、荒井正吾奈良県知事とパトリック・シープ・ミネソタ州ロチェスター市DMC経済開発局経済開発地域づくり局长による基調講演と、後藤春彦早稲田大学MBT研究所所長およびMBTコンソーシアム幹事会による報告会で構成されている。入場は無料、定員1100名。第二部は、「新産業創生のための企業と医師との交流相談会」(リーガロイヤルホテル東京)奈良県立医科大学教授陣(約70名)と企業との交流会を中心にシープ局長との意見交換会などが企画されている。会費2000円、定員500名。参加申し込みは、<http://pi-mbt.wix.com/home>まで。

開会を前に、奈良県立医科大学細井裕司理事長・学長と早稲田大学後藤春彦教授に話を聞いた。

(本誌・中村 幸之進)



後藤新平（1857～1929）
関東大震災後に内務大臣兼帝都復興院総裁として東京の帝都復興計画を立案したことで知られるが、元々は医師だった。

康寿命延伸のまちづくりを進めていますが、例えばお年寄りにたくさん歩いてもらったり、自転車を活用してもらうための施策が重要になっています。そうなると、社会資本である道路やトンネルでさえも医学の光を当て、人々の健康に資するインフラしていくという考え方ができるになってきそうですね。

細井 その通りです。医者は、それぞれの患者さんを助けようという意欲は非常に強いのですが、基本的に患者と1対1の関係です。ですから、これまで医者の関心は患者もしくは自分の研究が中心になり、産業創生や

まちづくりをしようという意識はほとんどありませんでした。しかし、本学の教授陣は、全員が一丸となつてMBTの意識を持つて対応しようとしています。おそらく、70名以上の医学部の教授が一堂に会して産業創生をする、あるいはまちづくりに取り組むようなイベントが東京で開催されるのは初めてではないでしょうか。

後藤 関東大震災後、東京の帝都復興計画を立案した後藤新平は、元々医師でした。彼は、内務大臣、東京市長などを歴任しますが、医学の視点からの業績が数多く見られます。例えば、台湾総督府民政局長時代、経済改革とインフラ建設を進め高い評価を得ますが、後藤は、徹底した調査事業を行って現地の状況をつぶさに把握します。後藤自身は、この手法を「生物学の原則」に則つたものと説明していますが、まさにMBTそのものと言えるわけです。わが国に

おいて、こうした発想を大学ぐるみ一丸となつて追求されているのは奈良県立医科大学をおいて他にはありません。早稲田大学が奈良県立医科大学と連携している意味は、まさにこの点にあると言えるのです。

ペイシェント・ファースト（患者第一）をまちづくりの根幹に据えるロヂエスター市

——奈良県立医大では、今年1月に「MBTコンソーシアム研究会」設立記念のシンポジウムを開催されたと聞きました。

細井 はい。地元の奈良県権原市でMBTシンポジウムを開催し、行政関係者のみならず、銀行、電力会社、IT企業、印刷会社など民間企業からの参加者も含め総勢632名の方々に参加いただきました。11月のコロキウムは、東京開催ということもあり、より多くの皆さんに参加いただきたいと願っています。



今年1月に開催されたMBTコンソーシアムシンポの様子
奈良県立医大69人の教授陣がブースを構え、参加企業と積極的にコミュニケーションの機会を持った。(奈良県権原市にて)

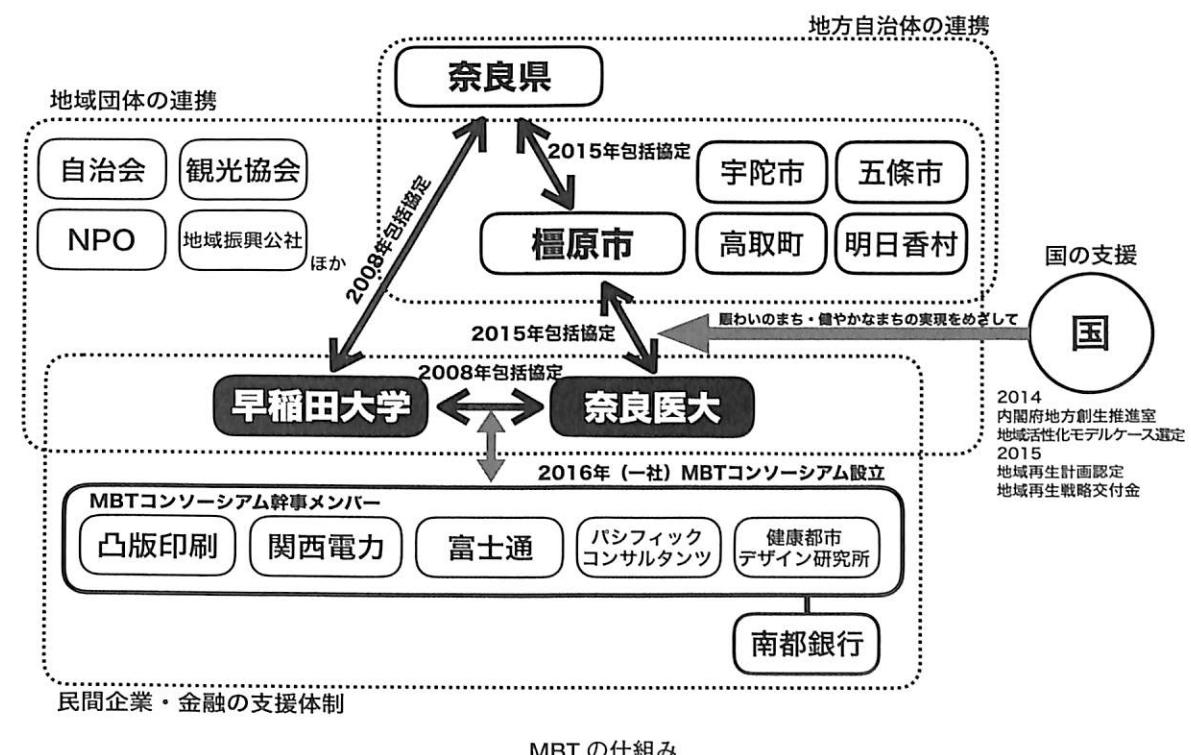
ご紹介し、共有していただきたいと思うことがあります。MBTとは、全ての産業に医学の光を当て、医学による産業の創生・再生を図るMBE (Medicine-Based Engineering : 医学を基礎とする工学、産業) をまちづくりに応用するという意味です。一般的には、まちづくりとロッパーが行います。しかし、MBTは、医学の知識をまちづくりに応用し、より付加価値の高いまちづくりを可能にすると

いう発想です。
よく誤解されるのですが、MBTは、決して医療産業の集積を目指しているわけではありません。住まいの中にあるたくさんのモノ、例えば家具や家にしても医学の光を当てる、人の健康に寄与する家具や、長生きが可能な家ができる可能性があります。超高齢社会にさしかかったわが国では、MBTに対するニーズは確実に高まっていると確信しています。

——多くの地方自治体では健



ごとう はるひこ
昭和32年生まれ、富山県出身。55年早稲田大学理工学部卒業後、62年同大学院理工学研究科博士課程修了、工学博士。平成2年三重大学助教授、6年、早稲田大学理工学部助教授、10年より現職。専門は、都市計画・地域計画。日本都市計画学会会長、世界居住学会副会長、内閣府地方分権改革有識者会議議員、同地域交通部会部会長などを歴任。



良県の荒井知事の基調講演をお聞きいただければ、県の考え方やバックアップ、地域包括ケアを中心とした医療を取り巻く環境などがご理解いただけると思います。また、米国ロチエスター市は、内分泌、消化器外科、高齢者医学、婦人科、腎臓、神経外科、呼吸器、泌尿科などにおいて米国ランクイン上位を誇るメイヨー・クリニックがある都市で、米国における医療先進的な地域として知られています。世界レベルでの医療を中心としたまちづくりが進んでいる同市シーブ局長の講演は、地方自治体の実務担当の皆さんにもきっとお役に立つでしょう。

後藤 私も3月に奈良医大の派遣団の皆さんと現地を訪れましたが、ペイシェント・ファースト（患者第一）のコンセプトを明確に打ち出した素晴らしい都市でした。人口は約14万4千人（2010年）ですから、奈良医大のある橿原市（12万4千人）とほぼ同じくらいの規模をイメージしていただければわかりやすいと思います。

ロチエスター市では、「The needs of the patient come first」というフレーズがいたるところに使われていて、都市づくりも患者第一という思想が貫かれています。

メイヨー・クリニックを中心には、患者用のショッピングモールがあつて、乳がんで胸をどちらの方のための装身具やかつらなどがごく普通に売られています。カラフルなデザインのブティックやアクセサリー・ショップも患者のニーズに応えるものなのでしょう。また、患者の家族用の宿泊施設も当然完備されており、周囲には臓器移植を持つ患者用の住宅もあります。臓器移植ですから、手術は明日かもしれませんのが、1～2年くらいかかるかもしれません。しかし、希望を持って臓器移植されるのを待っている人たちが、人間らしく暮らせるまちというの



ロチエスター市の光景

スカイウェイが広がり、外気に触れずに行き来ができる。

人）とほぼ同じくらいの規模をイメージしていただければわかると思います。メイヨー・クリニックの内部にも、例えばペイシェント・エンデュケーション・センターといふ患者が学べるミュージアムのような施設や子ども病棟の最上階には子ども用の図書館、歴史あるチャペルなども併設されていて、まるで1つのまちが病院の中に出で上がっているかのようでしたね。

患者や病院利用者はパーキングで車を停めたら、そのままスカイウェイと地下道を通して、病院まで一度も外気に触れずにたどり着けるような歩行者ネットワークも構成されています。このスカイウェイ建設については、公共が負担するのはデッキ部分のみで、他は民間のビルやホテルのオーナーが建物内部の通路を造る仕組みになっていますが、ネットワークはどんどん広がりを見せています。

後藤 ご指摘通りです。ここでの研修にあこがれて若いお医者さんが全世界からやってきます。ロチエスター市には、無理でもメイヨー・クリニックで働きたいという多くの人材、医療関係者を集める力があるわけですね。同時に、この病院の周りには高度医療の最先端を扱う企業も集まっています。まさに最新の診療機器なども、メイヨー・クリニックと一緒に開発することによって市場を世界中に獲得できるので、企業にとってもビジネスとして成り立ります。つまり、民間投資が促進されることによって市場を世界還元される仕組みが内包されているのです。今後、20年間でロチエスター市は60億ドルを超える投資を呼び込もうとしているそうです。日本と中国の違いはありませんが、ロチエスターの病院を中心とした民間投資が促進されるまちづくりのモデルは、行政関係者、民間企業双方にとって大変参考になるはずです。



今井町の町並み

細井 私たちが目指すMBTの姿は、最先端の医療を研ぎ澄ますだけのものではありませんが、MBTの概念をご理解いただき意味においてはロチエスター市のような先進モデルも知つておいて損はありません。民間企業の皆さんには第1部の基調講演だけでなく、第2部の交流相談会にもぜひ奮つてご参加いただきたいと思います。

後藤 70人を超える医大の教授陣が一堂に集う機会はほとんどないので、企業関係者にとってもまさにビジネスチャンスと言えるでしょう。

もうひとつ、私個人の希望を言えば、学生にも聴講して欲しいですね。と言いますのも、高齢化が進む中で、まちづくりは若い人をいかに担い手としてとり込めるかという点が重要な鍵になっています。早稲田大学MBT研究所では、奈良医大のお

膝元の橿原市今井町を実験フィールドに実践的な研究を進めていますが、伝統的な町並み保存で有名な今井町も高齢化が激しく、若い人の姿はあまり見かけません。そこで、奈良医大の学生さんの力を借りし、医大生との共創によるまちづくりの推進を進めるストーリーを日論んでいます。高齢化というキーワードは、全国どのまちにとつても共通の課題ですから、将来医師や看護士となる奈良医大の学生諸君に、ぜひともキャンパスの外でMBTの概念を学んで欲しいと思うのです。

——では、議論を奈良県立大で進めておられるMBTの実例に移したいと思います。後藤教授から、橿原市今井町で行われている実験についてお話をありましたが、この実験について

まち 자체が社会的な健康を取り戻すことを目的にしています。今井町は、東西約600メートル、南北約310メートルの地区内に約500棟の伝統的建造物が連なり、国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定されている町並みです。中世において「大和の金は、今井に7分」と言われるほど繁栄し、堺などともに自治都市として知られました。「町並みの法隆寺」とも言われるわが国を代表する瓦屋根と白漆喰の見事な町並みは、今もなおその面影を伝えてくれています。ただ、高齢化がかなり進み、コミュニティとして見守りが必要なケースや空き家になつて手を加えない住めない家屋も出てきています。

そこで、同町の伝統的建造物群の何軒かを「まちなか医療拠点」として再生活用し、まず地域住民の皆さんのが生き生きと暮らせる実証実験をスタートさせたい手として期待される奈良医大の学生ボランティアには、一定の教育が実施されるのでしょうか。

奈良医大の学生ボランティアは、医大生や看護学生は、将来医療人として大きな役割が期待されていますので、彼らが今井町の実証実験現場を通して高齢者との交流を促進してくれれば教育の場としても生きてくるわけです。

細井

もちろん実施していくつもりです。今井町内に学生寮も建設し、彼らには実際に住んでもらうわけですし、医大生の力も使ってまちづくりを行い、最終的には、地域住民に安全安心の思いを抱いてもらいたいと思います。

後藤 今井町の特徴を安全・安心という面から挙げると、歩行時代にできた町ですから、道幅が狭く自動車などの通過交通が入って来れません。つまり、人々が歩いて暮らせる環境です。言い換えれば、地域ぐるみ

してまちを再生すると同時に、まち 자체が社会的な健康を取り戻すこと目的にしています。今井町は、東西約600メートル、南北約310メートルの地区内に約500棟の伝統的建造物が連なり、国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定されている町並みです。中世において「大和の金は、今井に7分」と言われるほど繁栄し、堺などともに自治都市として知られました。「町並みの法隆寺」とも言われるわが国を代表する瓦屋根と白漆喰の見事な町並みは、今もなおその面影を伝えてくれています。ただ、高齢化がかなり進み、コミュニティとして見守りが必要なケースや空き家になつて手を加えない住めない家屋も出てきています。

そこで、同町の伝統的建造物群の何軒かを「まちなか医療拠点」として再生活用し、まず地域住民の皆さんのが生き生きと暮らせる実証実験をスタートさせたい手として期待される奈良医大の学生ボランティアには、一定の教育が実施されるのでしょうか。

奈良医大の学生ボランティアは、医大生や看護学生は、将来医療人として大きな役割が期待されていますので、彼らが今井町の実証実験現場を通して高齢者との交流を促進してくれれば教育の場としても生きてくるわけです。

細井

もちろん実施していくつもりです。今井町内に学生寮も建設し、彼らには実際に住んでもらうわけですし、医大生の力も使ってまちづくりを行い、最終的には、地域住民に安全安心の思いを抱いてもらいたいと思います。

後藤 今井町の特徴を安全・安心という面から挙げると、歩行時代にできた町ですから、道幅が狭く自動車などの通過交通が入って来れません。つまり、人々が歩いて暮らせる環境です。言い換えれば、地域ぐるみ

で“未病”を防ぐような環境が整えられていると言えるわけですね。また、リハビリ患者さんがここに転院すれば、車椅子や杖の歩行練習など、病院内の廊下ではなく、人間らしい環境の中でトレーニングができるわけですね。

もう1つの視点としては、今井町のような日本の伝統的な木造市街地の中に健康基盤を形成していきたいと考えています。これは、奈良医大産婦人科の小林浩教授が「妊婦さんの健診も、いろいろな患者さんがいる大学病院より、今井町のような町並みの中でやったほうがはるかに心穏やかな健診ができるのではないか」と話されていましたが、ヒントになっています。細井学長はじめ、同大教授陣の皆さんと議論を重ね、安全・安心の見地から今井町に挿入するのにふさわしい機能を今後も探していきたいと思います。地域住民にとって“未病”を防ぐ環境の

整った町ですし、外来患者にとっても暮らしの息づかいが感じられる場所のもう安心感は得がたいものがあると思います。最終的なゴールとしては、TM-O（タウン・マネジメント・オーガナイゼーション）を設立し、今井町にふさわしい人と機能が町並みに挿入されて、空き家の4割くらいが再生されることを目指しています。

細井 今井町には、海外からの研究者や留学生のためのゲストハウスを設置する予定です。まさしく、「今井町アネックス・プロジェクト」は、早稲田大学MBT研究所と奈良医大、MBTコンソーシアム企業が、奈良県や権原市の協力のもと、医学の光を当ててまちの再生を図る画期的なプロジェクトと言えるでしょう。今井町のように人の息吹を感じられる町並みは、日本全国にあります。できるだけ多くの皆さんにMBTを知ってもらいたいと思います。地域住民にとって“未病”を防ぐ環境の

よって、町並みが再生し、産業創生や地方創生に結び付けられると思っています。

教授陣、学生が一丸になつて、MBTを進めて行く

後藤 「今井町アネックス・プロジェクト」を通じて、日本でも公衆衛生の概念がもつと拡大し、医学が人の健康とまちの健康を合わせて扱うようになることを期待しています。そして、全国の医大の公衆衛生の授業の中にまちづくりを位置付けてほしいと思います。

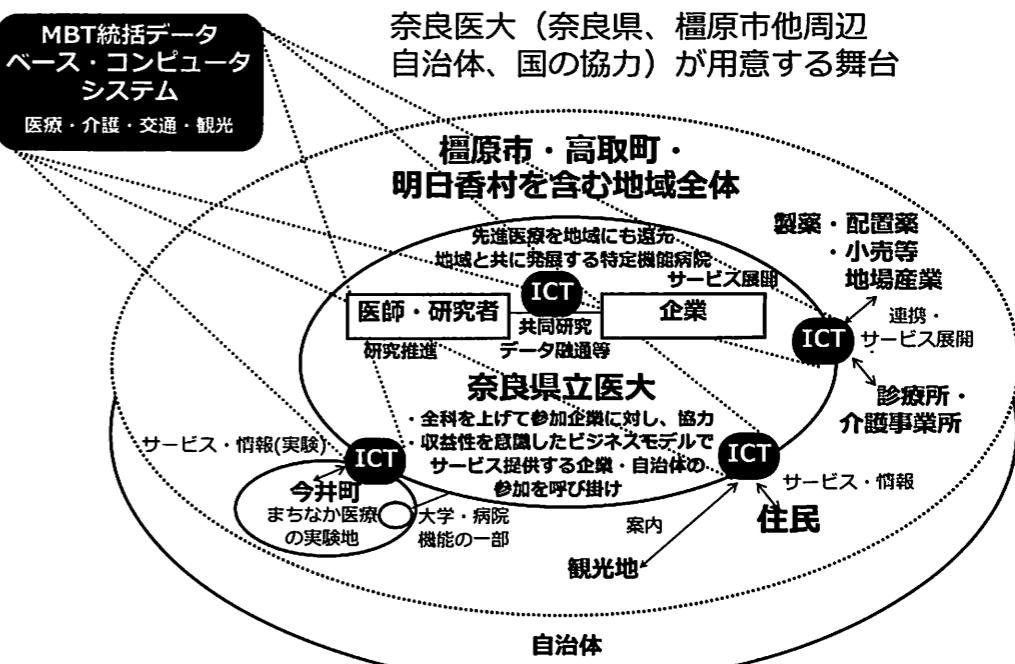
アメリカでは公衆衛生が学問分野としてすごく大きな力をを持ついますが、日本の場合は卒業後の就職先が少ないため、臨床医学や基礎医学に比べて人気がないと聞きます。

細井 奈良医大には公衆衛生に関する講座は、疫学・予防医学、公衆衛生学の2講座があります。本学の学生には、MBTの発想をカリキュラムとして学

ます。MBTコンソーシアムに加わる民間企業の協力も得て、ICT技術を活用して今井町と研究を進めます。また、科学技術のみならず社会技術の開発も大切で、見守りの担い手として、奈良医大の医大生や看護学生にもボランティアとして参加してもらいたいと考えています。

細井 団塊の世代が75歳を迎える2025年に向けて、全国各地で地域包括ケアシステムの構築が進められていますが、医師・看護師・介護士・薬剤師などコア部分を形成する専門スタッフ以外の周辺スタッフをどう構成するかが大きな問題になっています。奈良医大が行うMBTにおいては例えば周辺スタッフとして、宅配業者や郵便配達業者などを想定しています。ただ、医学的な知見を持ち合わせていないため、さまざまなトラブルが起きる可能性も否定できません。

MBT実現のプラットフォーム



出典：奈良県立医大・早稲田大 共同研究 2013.3

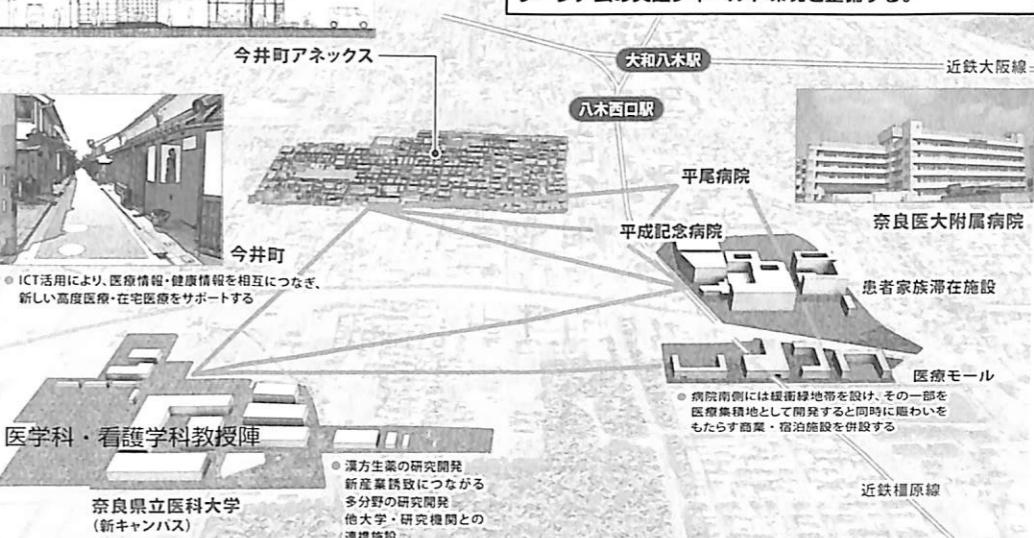


空き家を医大の施設として再利用

●重要伝統的建造物群保存地区の
空き家を活用し、医療と観光の連携により人もまちも元気になる

今井町等 医療・健康まちづくり

奈良県、橿原市と連携し、まちなか医療・研究施設を整備するなど、「橿原市総合戦略」の取組を実行し、MBTコンソーシアムの実証フィールド環境を整備する。



奈良県立医大 新キャンパス整備・現キャンパス再整備

出典・奈良県立医大・星稟田大 共同研究 2013.3

んでもらい、持続可能性のある
まちづくりを実践する担い手に

なつてもらいたいですね。

で、奈良医大の学生たちと一緒に仕事を進めていくわけです。が、奈良医大の学生さんは、どこの大学を出た後に進路を変えて、再チャレンジで医学を目指しているケースが多くて、とても専門の幅が広いですね。例えば、早稲田大学建築学科出身で設計事務所に勤めていたキャリアを持つ学生もいらっしゃいます。加えて、サークル活動も素晴らしいものがあつて、例えば「チームPREドクターズ」には全面的に今井町のまちづくりへ参画してもらう予定です。

——「チームPREドクターズ」とはどんなサークル集団なのです。

の他、目的達成にふさわしい事業などを事業活動に挙げて、学生有志がまちづくり活動を始めているんですね。空き家を自力で改修して「寺塾」という学習塾を立ち上げ、民間の学習塾の3分の1ぐらいの費用で近所の子供を預かりたり、レストランや貸しイベントスペースも開業していますね。こうしたスマート・ビジネスで得られた資金を基に、災害時のボランティア活動をしているわけです。彼らの活動は、対外的にも非常に評価されていまして、トヨタ財団や、ハウジングアンドコミュニティ財団などから研究助成費も得ています。医大の学部の1・3年生あたりでこういう実践的なまちづくり活動を経験した学生は、将来、医療人としても魅力的な方になると期待しています。

的に行っていますね。

後藤 学生サークル活動といふのは、キャンパス内で閉じてゐるケースが多いわけですが、学外に広がる志向を持つてゐるんですね。プロジェクトを進めていく上で、彼らの外向きの志向は、非常に心強いものがあります。

んけれど（笑）、高度医療の頂点に立たれている偉い方が大学内に鎮座しているという感じを持つっていますよね。しかしながら、奈良医大の特長として、細井学長以下教授陣のみならず学生も一緒にあって、学外に出て積極的にMBTを進めていくうとされています。私は都市計画を専門とする人間なので、まち

細井 確かに「チームPREDE」という名前で、ドクターZの視点を持った学生もいる反面、

を専門とする人間なので、まちを起点に物事を見ていくのです
が、まちが再生するためには、まちに住む人が心身ともに健康

ありません

いうことが必要なのです。医療に携わる教授陣や学生たちが、

るのは、一将来、君たちは医療人として現場に出ていくわけだから、とにかく外に出て行って、いろんな人たちと交流しないとい。もちろん、医療人としてのスキルが高まるような交流を自

いい意味で目線を逸ぐしてしまった
「大の挑戦は、わが国でも類例の
ない事例として位置付けられる
と思いますね。」
細井 皆さまに会場でお会

後藤 一般的に、医学部のイ
メージは白い巨塔ではありませ

——本日はありがとうございました。